

韓国でも話題の「くまもとアートポリス」

韓国からアートポリス見学ツアー

くまもとアートポリスが、韓国でも関心を呼んでいるという。建築を学ぶ学生たちが研修旅行で熊本を訪れたり、一般向けのインテリア雑誌がアートポリスを紹介し、熊本市宮新地団地を共同住宅の模範的なモデルとして例にあげたり、と注目を集めている。

1月22、23日には、韓国の首都・ソウルにある京畿大学の禹慶國教授ら指導教官4人と同大学建築工学科の学生54人が、熊本県を訪問。鹿央町にある県立装飾古墳館や八代市の市立博物館、熊本市の市営新地団地などを見てまわった。

学生たちは、カメラやビデオでアートポリスの建物を撮影しながら熱心に見学。禹教授は、「くまもとアートポリスのことは、日本の建築雑誌を見て早くから知っていました。とても参考になりますね」と語った。



写真を撮ったりメモをとったりして見学する韓国の大学生たち

新進建築家として大きな期待

宇土マリーナハウスの設計者、吉松秀樹氏が日本建築家協会新人賞を受賞

くまもとアートポリス参加プロジェクトの、宇土マリーナハウスを設計した吉松秀樹氏が、本年度の日本建築家協会新人賞を受賞した。同賞は新進の建築家の作品を発掘することで、建築文化の向上を目指そうというもの。本年度は35点の応募があり、宇土マリーナハウスを含めて3点が選ばれた。宇土マリーナハウスは、「内部と外部が複雑に交差した魅力的な空間」と評価され、今回の受賞となった。



吉松秀樹氏



宇土マリーナハウス

アートポリスのプロジェクトをプロの視点で見学

見学モニターツアーを実施



昨年10月2日、3日、くまもとアートポリス見学モニターツアーが開催された。参加者は延べ約140人。鮎の瀬大橋設計者の大野美代子氏と中央技術コンサルタンツの吉尾英春氏、不知火文化プラザ設計者の北川原氏による設計者自身の説明を参加者は熱心に聞いていた。参加者にはモニターとしてアンケートを実施。

アンケート回答より

- それぞれに考えられたデザインで、熊本のイメージアップに役立っているようだ。(25歳・女性)
- 熊本の財産が増えていくという感じがする。(59歳・女性)
- 熊本の文化、歴史を土台として計画されているので、県民に近いものになっているのでは。(21歳・女性)
- デザインだけが重視されている印象を持っていたが、住む人、使う人のことも、十分考えられていることが分かった。また、環境との調和も考えられている。(43歳・男性)
- 各地にポツポツとユニークな建造物をつくるだけでなく、その周辺地域も含めてバランスのとれた町づくり、村づくりを考えたらどうか。(74歳・男性)



◆巻頭寄稿 アートポリスを歩く 三浦洋一氏

特集●SPECIAL EDITION

アートポリスの「これまで」と「これから」

高橋 誠一氏・伊東 豊雄氏

●進行プロジェクト紹介

氷川ダム管理所 一の宮警察署内牧交番 八代市立高田あけぼの保育園

●第5回「くまもとアートポリス推進賞」発表

●完成プロジェクト紹介

●わたしたちのアートポリス 大野美代子氏

◆巻頭寄稿

アートポリスを歩く

熊本県文化協会会長 三浦 洋一



熊本城の石垣と対峙する魅力ある合津石の外壁

裏側のボードパネルも美しく配置され、設計者の気配りが感じられる



「素晴らしい」と三浦氏が絶賛する4階展示室

再生以前

県立美術館分館は旧県立図書館の構造材を利用して



現在

92年竣工した県立美術館分館



熊本城の石垣と調和しながら 静かに主張する美しき再生建築

●●●熊本県立美術館分館

熊本城域やその周辺には熊本市会館(佐藤武夫)、熊本県医師会館(坂倉準三)、熊本市博物館(黒川紀章)、熊本県立美術館(前川國男)、熊本県伝統工芸館(菊竹清訓)などがある。括弧内の建築家はどれもわが国屈指の人たちで、これに熊本市庁舎(山下設計)を加えてもよい。また民間ではあるがホテル・キャッスル、アークホテル、更には三井ビルのように質の良い建物もある。

30年近く前、熊本県医師会を設計することになった坂倉準三さんの希望で熊本城域と千葉城界隈を歩き回ったことがある。今の美術館分館のところには県立図書館があったが、その他の公共的な建物はまだ姿を見せていなかった。やがて辿りついた月見櫓跡から市街地をみはらしながら「やはりこの環境にいちばんふさわしいのは、あの兵舎のような建物ですね」と言いながら足許に見える十四間櫓などの櫓群を指差しておられた。当代一流の建築家にとって熊本城の環境がそれほど大きい関心事であることが分かったし、建築家の課題を知る機会にもなったと思っている。

30年の歳月は城内の環境も城郭周辺の建物も一変してしまった。わが国のどの城下町も変わったに違いないが、熊本は建築家に恵まれてお城をとりまく環境の調和はたいへい町に較べても遜色がない。なかでも美術館の分館の存在が大きい。それまでの日本の建築家の作品は美術館の本館、市の博物館、伝統工芸館、市庁舎など暖色の渋い色のタイル張りが主流であった。城内の建築物は特に高さも制限されるため、これらの建築群は全体として控え目な、抑えた表現が選ばれ、好ましい調和がはかられてきた。

しかし美術館の分館を設計したトレスとラペーニャという二人のスペイン人は従来と全く違った手法で、むしろお城や城壁と対立する構造物を造りあげた。単純な立方体にした壁は全面的に合津石を斜めに張りめぐらせ、ファサードの入口は低く抑え、窓も最上階に深い軒におおわれて用意されている程度である。このため建物から言いようのない沈黙性を感じるが、同時に柔らかな合津石の斜め張りのためにひびく優美な印象を受ける。

屋上に銅板ブキの不思議な形の構造物が乗っているが、これは展示ウォールを収納する目的のものである。このため建物全体からヨーロッパの兜のような印象も受けるが、この形も機能を追求したうえで獲得された内発的なものである。兜のような赤銅の形と優美な外壁の肌。矛盾したような素材の組合せがヨーロッパの伝統の香りを伝え、このため熊本城の無骨で豪壮なスケールを却って際立たせることになった。

この分館は県が経費を節約するため図書館の基礎や柱などの躯体部分を残して着工した、いわゆる再生建築である。建築費も17億円という、今からすると驚くほどの低コストで1992年に完成している。わが国には本格的な再生建築の機会が少なく、経験のある建築家も少ないためスペインの二人になったと聞いている。図書館から美術館へと全く異なった性格のものを再生する。熊本では初めての、わが国でも珍しいケースになったはずである。

当初から柱をどうするか懸念されていた。再生とは言いながら建物

の基本的な骨格は変更できないので、結局1・2階の展示場にはそれぞれに大きな柱が4本ずつ残ることになり、展覧機能が可成り阻害されることになってしまった。インストレーションでは逆に柱を利用することもできると思うが、まだそうした機会に恵まれていないらしい。

しかし4階の会場は素晴らしい。700名収容のホールのとだけ天井が高く、広びろとした空間には柱もない。天井から外光も充分に取り入れてあるので、ここで展示される作品はヨーロッパの美術館なみの待遇を受けることができる。作品の搬入、搬出は東側の裏口から行うようになっており小規模の駐車場も用意してある。ここから見上げた東側の壁は西の正面とは違ってボード板の大きなパネルを一面に取りつけ、向かって右のタテ一列だけは北側からまわりこんだ合津石が張りつけてある。

合津石は案外に高価で、このため一層の節約を余儀なくされたとはいえ、お陰で私たちは別趣の建築美を堪能できることになった。雨模様の下で黒っぽいこの壁が鈍く発光したように光っているのを見ると、都市美のかくし味を見つけたようである。もしこの建物がスペインにあつたらどうだろう、と想像する。こんなにこまやかなかくし味どころか建物そのものもスペインのさまざまな建造物に呑みこまれてしまい、千葉城の一角で発揮している魅力もヨーロッパの香りも霧散してしまうにちがいない。勝れた建物は環境の価値を高めるが、勝れた環境によって建物の価値を高められることもあるのだ。

ここにトレスとラペーニャの言葉を引用したい。「ヨーロッパにおけるリノベーション(刷新・再生)は古い構築物に新しい生命を与え、蓄積された記憶を保存する目的で行われてきた。旧図書館は歴史的なランドマークではないから、我々は単なるリノベーションに止まらず、ラディカルな変革を行うべきだと考えた。

建物の新たなイメージは、それが面する熊本城の石垣の壮大さと力強さに呼応するとともに敬意を払ったものである。(以下略)」

二人の言葉を読むと建築文化とは何か、近代建築とは何かということにいきつく。私のような建築の門外漢に答えられるはずもないが、ギリシャ、ローマの文明を経て教会建築に始まったヨーロッパの建築文化はロマネスク、ゴシックともに内発性の強いものであったことは容易に想像できる。産業革命のあとの近代はそうした拘束から解放されたときに始まるのだろうか。私はヨーロッパの絵画の歩みを念頭におきながらそう考えている。

わが国は日本画、和風建築、古典文学を別にとすると建築も美術も海外で既に来上ったものを受け容れてきた。古代まで遡ってみても初めて

百済の仏像に接した人たちは、信仰の対象ではなくむしろ芸術品として見ていたのではないか、という説が有力である。明治以後に始まった近代化でも建築、美術はおろか思想にいたるまで受け容れ続け、内発性の近代文化は科学を別にすると実りあるものがなかった。戦後にやっと建築、美術の面で日本人の海外での活動が目立ち、評価されるようになった時期にアートポリス(KAP)のプロジェクトが始まった。

KAPでは日本の建築のレベルを海外の建築家の作品と同列に見て享受できるのが大きな魅力である。トレスとラペーニャの美術館分館、レンゾ・ピアノらの牛深ハイヤ大橋の意義の大きさもそこにあるし、再生建築の独創的な価値の重さも知ることができた。

三浦 洋一

miura yoichi

P R O F I L E

大正5年(1916)生まれ。医師、洋画家。熊本県文化協会会長。洋画家坂本善三に師事。昭和37年独立展独立賞、昭和43年独立美術協会会員、昭和52年45回独立展出展の「青の形」が栃木県立美術館買い上げとなった。作品発表の傍ら、熊本の文化振興に尽力してきた。



●●●●コミッショナーとバイスコミッショナーが語る
アートポリスの「これまで」と「これから」

発信から、自立へ。 対話から生まれる 新しい建築の可能性に期待

熟成を経て、一歩進んだ建築づくりを

◆建築は自主性がある初めて生きるもの

コミッショナーを1年やってきて、施主となる地方自治体の方々とも直接話をする機会が多かったです。現場に出向いて生の声が聞けたことは非常によかったですね。町によっては、アートポリスを前向きに評価してくれているところもあり、励まされました。

建築とは、単に行政が一方的に箱物を造るというものではありません。そこに住む人が自発的にいろいろなものを集大成してできあがった建築が、まちづくりにつながっていくと思うのです。まちは、自主性があるからこそ初めてイキイキと活性化していく。建築は、何かを発信するという考え方をやめて、生活に溶け込みながら、それ自身が自立していくことが大事ではないでしょうか。

◆スピードがもたらす影響についての再考を

今の時代はみんな慌てすぎているという感じがします。メディアのスピードは驚異的で、生命の根源に迫るような問題がコンピュータ化されています。そのため、人間の生活のリズム、構成、風俗なども微妙に変わりつつあります。スピードの問題はものすごく大事なことです。人間は「時間」について、腰を落ちつけて考える必要があるでしょう。

建築でもスピードの問題は深刻です。本来なら時間をかけて継承されていた技術が短期間に伝えられていきますし、デザインについても、どこで誰が何を作ったという情報があ

っという間に世界を駆けめぐります。情報の影響力が大きくなっています。建築は、造る人、使う人、依頼した人3者のコミュニケーションが大事なのに、速さを求めるあまり、簡略化されていないでしょうか。建築とは熟成です。お酒や恋愛と一緒に、時間が必要なのです。熟成するには、ある時期に一度、自分自身に問い直す必要があると私は思っています。

◆「対話」に重点をおいて進める「私たちのまちづくり」

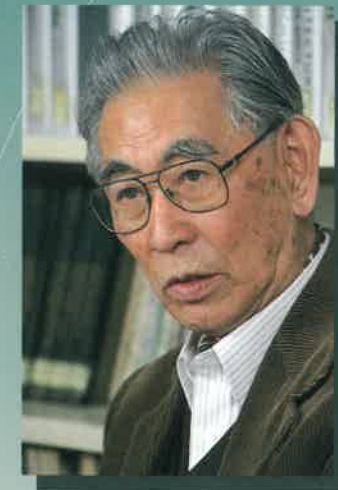
コミュニケーションとは、「対話」のことです。今後ますます建築は「対話」抜きでは考えられないでしょう。今年からくまもとアートポリスで始まった「私たちのまちづくり事業」は、「対話」に重点を置いています。この事業はまちづくりの計画段階から建築家が入って、それぞれの市町村に何が必要で、何が不要なのかをもう一度考え直すというものです。今回6市町村がこの事業に参加していますが、建物を造る計画があれば、その以前の段階までのもあります。きっと何か発見があるはずですよ。今回参加する建築家の方々も、対話ができる人を選んだつもりです。大学の先生が多いのは、先生と一緒に学生さんたちが現場に出向き、現場で語り合うことで、何かを学び、将来につながっていくと考えたからです。一石三鳥ぐらいの効果を狙っています。

建築というのは本来、社会文化です。ソフトメディアとも言えます。周囲とメディアに影響を受けながら、また、逆に周囲に影響を与えていくものです。社会の要望や希望を受け入れながら、ある種の飛躍も含めて、一歩進んだものを目指していく。単に要望を満たすだけではアーキテクチャーとは言えないと思います。その時、何が建築をつくり上げる道具になるのか。手段はきっと無数にあるはずですよ。

◆「熊本の土地が持つ潜在能力を生かす」

この1年で、熊本のあちこちを見て回りましたが、海があり、山があり、バリエーションがものすごく豊かですね。雄大でスケール感があり、土地そのものの潜在能力がある。そして、そこに住む人たちが刻み込んだ奥深い歴史も感じます。それらを、自分たちで温めていってほしいと思いますね。地元の人には、持っているものすごさに気づかないこともあるので、外部とのコミュニケーションで自覚することもあるかもしれません。

熊本の建築家にはもっとアートポリスに参加してほしいと思っています。私たちが知らないところでいい建築を造っている人もたくさんいらっしゃると思うんですよ。県下各地に出向くことで、新しい建築家を発掘していきたいですね。そこでまた新しい建築の方法が発見できるかもしれませんし、ただ、熊本に生まれて熊本に育ったから、熊本らしい建築ができるとは限りません。その人が、現場で何かを感じて、その感じたものを一度自分の中に取り込んで、改めて形にしてこそ初めて素晴らしい建築ができるのだと思います。



Teiichi
Takahashi
高橋 誠一 建築家

1924年 中国・青島生まれ/1949年 東京大学第二工学部建築学科卒業/1949~56年 逓信省宮内省設計課(郵政省建築部設計課)/1956~66年 武蔵工業大学助教授/1960年 第一工務設立・代表取締役/1967~95年 大阪芸術大学教授/1995年 大阪芸術大学名誉教授

作品

佐賀県立博物館/大阪芸術大学/実践女子大学校舎・体育館/筑波国際科学技術博覧会迎賓館/東京都立大学キャンパス/全労済情報センター/パークドーム熊本 ほか

受賞

日本建築学会賞(作品)(1971年・1982年)/芸術選奨文部大臣賞(1979年)/日本芸術院賞(1982年) ほか

日本各地のシンクタンク関係者を前に講演

「平成11年度地方シンクタンク協議会第16回合同研修会」で高橋コミッショナーが講演



情報交換、人材交流による地域での課題解決を目的に128団体が加盟する地方シンクタンク協議会。その第16回合同研修会が12月2日~3日、熊本市を中心に開催された。「地域文化の創造」をテーマに、シンクタンク関係者等84人が参加。2日、熊本北警察署や熊本市営新地団地、県立美術館分館などアートポリス施設を視察した後、熊本ホテルキャッスルにて高橋誠一アートポリスコミッショナーが、「アートポリスと地域文化の創造」と題して基調講演を行った。講演では、幾つかのアートポリス施設をスライドで見せながら一つひとつを解説。「県民自身の建物は県民に認められて初めて存在意義が生まれる。建物を造る際、市民権を得るためにどれほどの努力が重ねられたかが重要。アートポリスは、今後、県民とのフェイス・トゥ・フェイスの対話から発展させていきたい」と語った。



新地団地(左)や熊本北警察署(右)を熱心に視察するシンクタンク関係者



対話することで、建築の新たな可能性を探る

◆建築家以外の人との対話を

この10年間、アートポリスでは、20世紀の主流であるモダニズムの流れをくむ内外の建築家たちによって実にレベルの高い建築が次々に建てられてきました。建築家の視点から見ると、世界的にも素晴らしい作品が多いと思います。けれども、それ以外の建築の可能性はないのか、という視点から、高橋コミッションと私は「くまもとアートポリス」をとらえ直したいと考えています。そのためにはまず「対話をする事」。対話の相手は、地域の行政や、建築物を使用する人、そして広くは、建築家以外のすべての人々です。

建築家の中には、建築をもっと広汎な視野から考えたいと思っている人たちがいますが、そのチャンスがない。近代建築の路線にとらわれない建築家が登場することによって、「ああ、こういう建築のあり方もあるんだ」ということが見えてくるのではないかと考えています。そして、建築家自身も、対話することによって、それぞれの建築観が変わっていくのではないのでしょうか。私たちは、専門家とは違うアイデア、設計に興味があります。現在、農業大学校の学生寮の設計を依頼している藤森さんは、本来、建築史家です。藤森さんには、建築というものを、明晰にしかも分かりやすく語ってもらえるのではないかと期待しています。実際、学生寮も立ち上ってきましたが、これまでのアートポリス建築とは一味違ったものになるだろうと期待しています。

◆建築を客観的にとらえられる世界でも例を見ない「くまもとアートポリス」

建築家は、自分の関わる建築に夢中になりすぎて、他を客観的に見るチャンスが少ないと思うのですが、くまもとアートポリスは、建築を客観的にとらえて議論できる世界でも希有な場所だと思います。くまもとアートポリスのプロジェクトに携わると、建築家は他のプロジェクトを意識せざるを得ない。客観的に眺められる場所だと思うのです。もちろん、ただ見るだけでなく、ポジティブにお互いにコミットしていける一そんな点が刺激的だと思います。

◆建築家は、意識の改革を

建築家は、これから、私も含めて、意識を変えていかなければならないと思います。建築は、自分の創作活動や表現ではない。建築が発想されて世の中に出るまで、建築家はほんの一部しか占めてないのではないかなと思うのです。建築に関わるすべての人とパラレルで並んでいる一人だという意識でいなければいけません。

今や、情報は世界中に行きわたっていますし、情報の24時間発信も可能です。そのため、世界中が共通の場所になってしまったかのように思えます。一方で、実際には熊本に住んでいるという変えがたい事実もあります。2つの「場」の中で各人が、自分自身をどう位置づけるかということが問われてくるでしょう。その位置づけ方によって住まい方も変わってくるし、建築のあり方も変わってきます。この時代、一つの答えはありません。どういった建築が熊本らしいのか、そのモデルを今回の「私たちのまちづくり事業」や他のくまもとアートポリスプロジェクトで提案して、たくさんの人たちにいろんな方向から判断していただきたい。イベントをしたり、新しい建築を目にすることで生まれる対話を大切にしていきたいですね。



伊東豊雄 建築家

1941年 京城生まれ / 1965年 東京大学工学部建築学科卒業 / 1965~69年 菊竹清訓建築設計事務所 / 1971年 URBOT設立 / 1979年 伊東豊雄建築設計事務所に名称変更

作品

笠間の家 / シルバーハット / 八代市立博物館 / 八代市立保寿寮 / 八代広域行政事務組合消防本部庁舎 / 大館樹海ドームパーク ほか

受賞

日本建築学会賞(作品)(1985年) / 第3回村野藤吾賞(1990年) / 第33回毎日芸術賞(1992年) / 1997年度芸術選奨文部大臣賞(1997) ほか

進行プロジェクト紹介

観光拠点としての魅力も付加し、設計完了

氷川ダム管理所



ダム湖の全容を見渡せる傾斜地の中棚に造られるダム管理所。ダム管理の基本的な機能に加えて、桜の名所でもある氷川ダムの観光拠点としての展望所機能や研修などにも使える多目的ホールも設ける予定。東西46mの管理バルコニーからダムを見渡すことができる。執務室と操作室は、将来の変更にも対応できるフレキシビリティの高いワンルーム形式となっている。

◆◆◆ DATA

- 事業主 / 熊本県 ●設計者 / 野中暉夫
- 所在地 / 八代郡泉村下岳 ●主要用途 / 事務所
- 建築面積 / 351.56㎡ ●延べ面積 / 713.81㎡
- 階数 / 3階 ●構造 / 鉄筋コンクリート造+鉄骨造

室内空間の質の向上が目標

一の宮警察署 内牧交番



中尾 寛(なかおひろし)

1961年 兵庫県生まれ
1985年 京都工芸繊維大学
住環境学科卒業
1989年 筑波大学大学院芸術
研究科総合造形専攻
修士課程 中途退学
1989年~ 設計活動

- 主な作品
「週末住宅」「住宅/スタジオ」
- 受賞
1992年 くまもとアートポリス'92
デザインコンペティション第1部門
1992年 第9回吉岡賞

岩佐設計

代表取締役: 岩佐敏憲

- 主な作品
「阿蘇健康山荘」「里団地」
「進栄塗料社屋」「熊本工業高校セミナーハウス」

阿蘇町にある内牧温泉街の入口に位置する交番。このような位置にある建物のデザインには、往々にしてランドマークとしての外観の新奇さや、開かれたイメージだけを求められがちであるが、この交番では、素材の統一や、光庭を配することによって室内外の空間を一体化させることなど、とりわけ事務室、相談室を中心とした室内空間の実質的な開放性を目標として設計されている。

◆◆◆ DATA

- 事業主 / 熊本県警察本部
- 設計者 / 中尾 寛+岩佐設計
- 所在地 / 阿蘇郡阿蘇町内牧
- 主要用途 / 交番
- 建築面積 / 154.35㎡
- 延べ面積 / 111.00㎡
- 階数 / 1階
- 構造 / 壁式鉄筋コンクリート

設計者と使う人、事業主が対話を重ねながら設計中

八代市立高田 あけぼの保育園



今年1月7日、八代市立高田あけぼの保育園について、設計者「みかんぐみ」と、市立保育園園長、八代市役所担当者による3回目の会議が行われた。これまで事前調査をはじめ、保護者や保母へのアンケート調査、園長との対話形式での話し合いなどが毎月のように行われ、使う人に受け入れられる建物を目指して設計が進んでいる。内部は、園の教育方針の変化にも合わせて部屋の割り振りを変更できるよう、天井の高さを揃えるといった流動性を持たせた設計になる予定。外観は、目立った特徴は出さず、子どもにとって気持ち良い美しさになるよう心がける。アートポリス参加プロジェクトで保育園は初めて。

◆◆◆ DATA

- 事業主 / 八代市 ●設計者 / みかんぐみ
- 所在地 / 八代市本野町 ●主要用途 / 保育園
- 建築面積 / 約820㎡ ●延べ面積 / 約670㎡
- 階数 / 1階 ●構造 / 木造

新コミッション 初のプロジェクト

県立農業大学校学生寮が、着々と進行中



◆◆◆ DATA

- 事業主 / 熊本県
- 設計者 / 藤森照信+入江雅昭+柴田真秀+西山英夫
- 所在地 / 菊池郡合志町栄
- 主要用途 / 学生寮
- 建築面積 / 4063.9㎡
- 延べ面積 / 5297.9㎡
- 階数 / 2階
- 構造 / 木造+鉄筋コンクリート造



一か所一か所していけないに仕上がりに具合を見ていく藤森氏

昨年着工し、新コミッション就任後最初のプロジェクト、県立農業大学校学生寮が、その全貌を現し始めた。設計者である藤森照信氏、入江雅昭氏、柴田真秀氏、西山英夫氏の4人は、現場での細かいチェックを行っている。藤森氏は、東京から月に1度は来熊し、特に仕上げの漆喰の微妙なちがいが、凹凸、表面のツヤ、素材感などにこだわって現場に指示を出しており、「面積が広いので、木造建築としては、ばかばかりだと思っていたが、内部から見ると意外に奥行きを感じず、ほどよい大きさに思えるのでよかった。今回多用している自然素材は微妙なところが大事なので、その一つ一つを大事に仕上げたい」と語っている。

今年も魅力的な県内の建造物が仲間入り

第5回 「くまもとアートポリス推進賞」



今年も、熊本の優れた建造物7点が各賞に選ばれた。この賞は、企画、設計、施工及び施設の運用などに関する総合評価に基づき、書類審査、現地審査を経て選考した。今年の応募総数は28点。

推進賞 水上村立 湯山小学校

所在地 球磨郡水上村湯山
 事業主 水上村
 設計者 (株)川崎設計事務所
 施工者 味岡・今村建設工事共同企業体
 人吉電気工事(株)
 (株)球磨電設
 (株)九龍工多良木営業所



地域への開放、地域の特性を生かした学校づくりを目指し、設計者や住民、行政、学校関係者との間で話し合いが繰り返された。地場産材を多用したゆとりある校舎とともに、地域交流センターも併設され、新たな地域活性化を促すものとして期待される。

完成プロジェクト紹介

不知火文化プラザ

地域の不知火現象を外観のモチーフに、
地域と一体化した運営を。

不知火文化プラザ



一本の並木道が、既存の公共施設と一体化したゾーンをつくり、敷地東端の「築山」が鉄道の騒音を和らげるために設けられている。その一角に不知火文化プラザはある。ルーバースクリーンの外観のモチーフは、地元で見られる不知火現象。

この不知火文化プラザは図書館と美術館からなり、「子どもからお年寄りまで気軽に交流できる場」として、やわらかい雰囲気づくりをモットーに運営されている。例えば、建物と並木道の間の広場には、コンサートなどが開催可能な木製デッキやベンチが置かれ、芝生が張られている。そして、この芝生が、時には、グラウンドゴルフの練習に使われるなど、まさに「ふれあいの場」。さらに、図書館では、ボランティアの方々が子どもたちに絵本の読み聞かせを行ったり、美術館ではアトリエを開放(町外の方でも申し込み可)するなど、地域と一体化した運営を行っている。「図書館はよく利用します。今日はたまたまた来たら、読み聞かせの会があったので、参加しました。また、参加したいです」と読み聞かせの会に参加した母親はそう話す。造った人たちやそれを利用する人たちによって、この施設が地域のシンボルとなり愛されていく姿がかいま見える。

推進賞 中央町総合交流ターミナル 「石段の郷 佐俣の湯」

所在地 下益城郡中央町佐俣
 事業主 中央町
 設計者 (有)SDA建築設計事務所
 施工者 (株)さとうベネック熊本支店



温泉、川を通じた、町内外の人々の交流の場を目的としている。緑豊かな川の縁に沿って建物が広がっており、極めて素朴な心でデザインされている。来訪者は、表情豊かなアーチを通り抜け、視界に入る豊かな自然を感じながら施設内に入っていく。

推進賞 選賞 植柳新町公民館 (地域学習センター)

所在地 八代市植柳新町
 事業主 植柳新町町内会
 設計者 みかんぐみ
 施工者 (株)米本工務店
 大栄設備工業(有)



公民館建設委員会設置、指名設計競技による設計者選定などのプロセスを経て造られた。極めてシンプルなプランにより、徹底した合理化とローコスト化を実現している。様々なニーズに対応し、地域活動の活発化などに大きく貢献している。

推進賞 選賞 シルワ・エッセ

所在地 熊本市江越
 事業主 森上孝雄
 設計者 (有)ロクス
 施工者 (株)岩永組



都市的状況の中に建つ、店舗と住居の複合ビル。メゾネット形式の住居ユニット内や、街へ開かれた表情を持つとするとガラス・スクリーンなど、様々な工夫がなされ、都市における「住む」と「仕事」という素因を統合する新しい生活スタイルを提案している。

推進賞 選賞 50M-檜の森 美術館

所在地 阿蘇郡小国町西里
 事業主 吉村郁夫
 設計者 桂英昭+A-I-R
 施工者 (有)鳩野建設



標高約750mの広大な高原、牧草地中央に、檜の森を背景にした立地。間口約6m、長さ約50mの細長い矩形プランは一つの連続空間であり、将来の美術館運営なども想定して建設された。

推進賞 選賞 宮崎耳鼻科

所在地 熊本市荻原町
 事業主 宮崎代介
 設計者 かわつひろし建築工房
 施工者 (株)岩永組



幹線道路に面した広い駐車空間。その奥の、正面にステンレスのルーバーを施した建物は、1階が医院、2階が住居で構成され、都市における景観や環境を意識して造られている。

推進賞 選賞 矢野邸

所在地 熊本市横手
 事業主 矢野敏之
 設計者 森繁・建築研究所
 施工者 (株)レキセイ



二つの白い立方体がほぼ直交に重なった建築。「眺望を生かしたシンプルなお家」という希望を実現し、眺望の確保や居間・食堂・デッキテラスと植栽スペースが一体化した開放的で広い空間を創りだしている。



北川原温
KITAGAWARA ATSUSHI

建築家プロフィール

1951年 長野県生まれ
 1974年 東京芸術大学美術学部建築科卒業
 1977年 同大学大学院修士課程修了
 1980年 北川原温建築都市研究所設立
 現在、東京芸術大学非常勤講師

◆主な作品◆
 METROCA
 ARIA
 ビッグバレットふくしま 他
 ◆受賞◆
 1991年 JIA新人賞受賞
 1997年 日本建築学会作品選奨受賞 他

DATA	
事業主	不知火町
設計者	北川原温+伊藤建築事務所
施工者	西松建設九州支店
所在地	宇土郡不知火町高良東割2352
主要用途	美術館、図書館
建築面積	2,133.10㎡
延べ面積	1,793.18㎡
階数	1階
構造	鉄骨造
施工期間	1998年2月-1999年4月



個人で本の読み聞かせのボランティアを行っている坂本美樹さんの家は、不知火文化プラザのすぐ近く。本と子どもが好きなので、同プラザの図書館で募集告知を見て応募した。「自分が楽しみながら読むことで、子どもたちも楽しんでくれるのでは。今、友達にも声をかけてます」と語る。

周囲の風景に溶け込んだ、開放感のある空間を実現。

富岡園地公衆トイレ



最優秀賞に選ばれた模型

国立公園内の恵まれた自然環境の中にある公衆トイレ。心地よい風の吹き抜ける「開放感のある空間」として、周囲の風景に溶け込んだものとなっている。木製ルーバーは外からの視線をさえぎり、ベンチは腰かけて公園全体を望むことができる。また、トイレの扉や、ブース壁面にも木材が使用されるなど、杉、桧の素材感が随所に生かされ木のぬくもりを感じさせている。一枚のRC壁と、それによって支えられる大屋根で構成される極めてシンプルな「やじろべえ空間」は、これまでの公衆トイレになかったスムーズな人の動きを期待できる。

コンペで選ばれた設計者の松本氏は、完成したトイレを訪れた感想を「思っていたよりもスケール感が出た。できるだけ多くの人に利用され、愛されるトイレになればうれしい」と語っている。



●建築家プロフィール
松本 健志
MATSUMOTO KENSHI

1977年 熊本県生まれ
1999年 熊本大学工学部建築学科卒業
1999年～ 渡辺建築事務所勤務
平成10年7月に行われた、富岡園地公衆トイレエスキコンペに参加し最優秀賞に選ばれる。(当時大学4年生)

A・I・R

代表取締役 守田千歳
◆主な作品◆
森の里クリニック
小島内科小児科医院
小島邸
御立岬公園シンボル広場
◆受賞◆
1999年 第5回木材利用大型施設コンクール熊本県賞
1999年 五木村役場庁舎設計競技最優秀賞

DATA	
事業主	熊本県
設計者	松本健志+A・I・R
施工者	双川建設
建築	田中設備
電気・機械	
所在地	天草郡苓北町
主要用途	公衆便所
建築面積	65.22㎡
延べ面積	34.98㎡
階数	1階
構造	鉄筋コンクリート+木造
施工期間	1999年1月～1999年4月



自然との調和を第一に考え、人々にやすらぎの場所も提供。

水前寺江津湖公園管理棟



阿蘇山の伏流水が湧き出る江津湖は、年間を通じて水温が一定しており、独自の生態系をなしている。この一帯の公園を管理する水前寺江津湖公園管理棟は、自然との調和を第一に考えてつくられた。

屋根は、屋上緑化されていて、いわば緑の地面を切り取って浮かし、その間に施設を差し入れたような構成になっている。植栽には、管理のしやすさを考慮し、耐乾性を持つセダムという植物を採用。また、洪水時の冠水を考慮し床レベルが高くなっているが、階段だけでなくスロープも設置しており、これにより公園内の散策路に沿って自然に建物へアプローチできる。

建物内部については、正面入口右側に事務室等が配置されている。左側(江津湖側)には、展示や公園を訪れた方々の休憩にも使用できる会議室があり、いすに座ってデッキの向こうに広がる景色を一望することができる。散歩やジョギングをする人たち、夏に水遊びをする子どもたちなどの新たな憩いの場としてやすらぎを与えることだろう。

DATA	
事業主	熊本県
設計者	牛田英作+キャサリン・フィンドレイ
施工者	竹内工務店
建築	太平興産
電気	旭設備工業
機械	
所在地	熊本市広木町
主要用途	事務所
建築面積	299.00㎡
延べ面積	266.01㎡
階数	1階
構造	木造
施工期間	1999年2月～1999年9月



●建築家プロフィール
牛田英作 USHIDA EISAKU

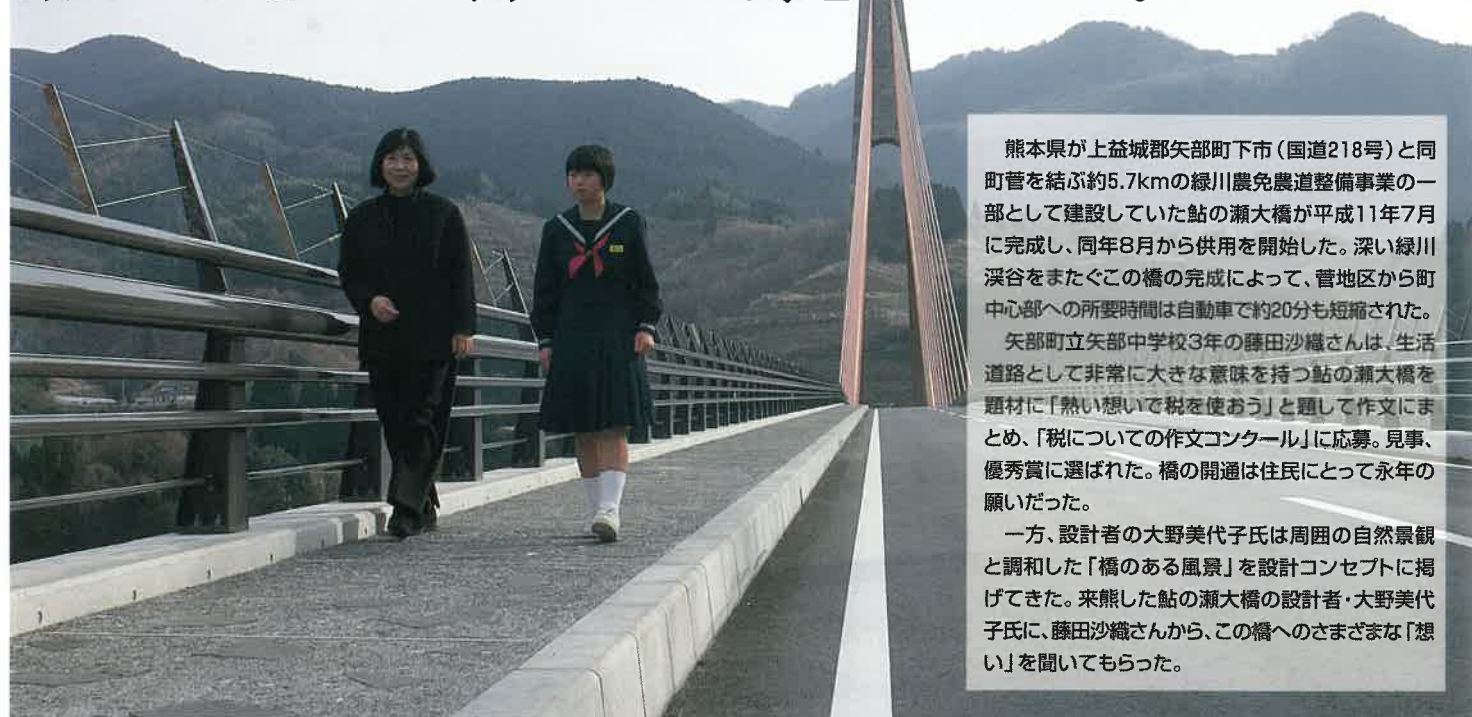
1954年東京都生まれ/1976年東京大学工学部建築学科卒業/1976～83年磯崎新アトリエ/1984～86年リチャードロジャースパートナーシップ/1986年牛田フィンドレイ建築デザイン事務所設立/1988年ウシダ・フィンドレイ・パートナーシップに改組

キャサリン・フィンドレイ KATHRYN E. FINDLAY

1953年スコットランド生まれ/1979年AAスクール卒業/1980～82年東京大学工学部建築学科修士課程、文部省給費留学生、磯崎新アトリエ勤務/1986年牛田フィンドレイ建築デザイン事務所設立/1988年ウシダ・フィンドレイ・パートナーシップに改組

◆主な作品◆
ECHO CHAMBER, TRUSSWALL HOUSE, SOFT&HAIRY HOUSE、保養所懐山居、ビリヤードハウス ほか

地元・設計者・施工者…さまざまな「熱い思い」が 自然と融合した「橋のある風景」をつくった。



熊本県が上益城郡矢部町下市(国道218号)と同町管を結ぶ約5.7kmの緑川農免農道整備事業の一部として建設していた鮎の瀬大橋が平成11年7月に完成し、同年8月から供用を開始した。深い緑川渓谷をまたぐこの橋の完成によって、菅地区から町中心部への所要時間は自動車約20分も短縮された。

矢部町立矢部中学校3年の藤田沙織さんは、生活道路として非常に大きな意味を持つ鮎の瀬大橋を題材に「熱い思いで税を使おう」と題して作文にまとめ、「税についての作文コンクール」に応募。見事、優秀賞に選ばれた。橋の開通は住民にとって永年の願いだった。

一方、設計者の大野美代子氏は周囲の自然景観と調和した「橋のある風景」を設計コンセプトに掲げてきた。来熊した鮎の瀬大橋の設計者・大野美代子氏に、藤田沙織さんから、この橋へのさまざまな「思い」を聞いてもらった。



設計者
大野 美代子
ONO MIYOKO
設計者プロフィール

1963年
多摩美術大学デザイン科卒業
1966年
オートー・グロウス建築設計事務所(スイス)
1971年
エムアンドエムデザイン事務所設立

●主な作品
横浜ベイブリッジ、首都高速葛飾ハーブ橋、横浜市フランス橋歩道橋、広島市鶴見橋、小田原ブルーウェイブリッジ、名古屋港中央大橋

●受賞
1985年 日本インテリアデザイナー協会賞
1977年、1986年、1989年、1994年、1996年、1997年、1998年 } 日本土木学会田中賞



鮎の瀬大橋
DATA

橋長390m、幅員8mの片側一車線。140mの桁下高(川底からの高さ)は、熊本県一。

ダイナミックな谷と緑の重なり 景観を生かす構造とデザイン

●藤田 はじめまして、よろしくお願ひします。
●大野 こちらこそ、よろしくお願ひします。
●藤田 大野さんはこの橋を設計されるに当たって、「地元の自然を壊さない」ということを一番に考えられたと聞いています。この点で、苦労されたのは、どんなところですか。
●大野 私、この鮎の瀬大橋建設プロジェクトの設計者に指名されて初めて矢部町へやってきたとき、谷の風景のすばらしさに感動したんです。東京という都市に比べると、こんなすばらしい風景にはめったに出会えない。でも地元にいると、意外にそのすばらしさに気づかないことがありますね。あの深い谷と、周囲の緑の景観。それを壊さないために、構造の工夫をしたんですよ。
●藤田 工夫というと、どんなことですか?
●大野 鮎の瀬大橋は長い橋です。橋が長いと、桁を下から何本も支えないといけない。それだと、谷が深いため、不経済だし谷の景観を損なってしまう。だから数少なくタワーを建ててケーブルを張り、上から吊る斜張橋という構造にしました。でも、2本もタワーを建ててしまうと今度は山の景観を壊してしまう。できるだけスッキリさせたかったので、一方にタワーを建て、一方は下から支えるようにしました。鮎の瀬大橋の場合は、町の方から行くと山が迫っていて菅地区側は開けている。山が迫っている方はスッキリとケーブルなしで、開けた方にケーブルを張っています。

多くの「熱意」が橋を形づくる

●藤田 いろいろ苦労されて、橋が完成したときうれしかった

ことは何ですか。

●大野 それはもちろん、地元の人が喜んでくださったことです。
●藤田 私の友達にも鮎の瀬大橋を通して毎日通学している人がいます。役場とか中心地の方に行くのに便利になってすごくよかったです。友達の家の人も言っているそうです。
●大野 そう聞くと本当に造ったかいがあったと思います。菅地区の人は「どうしても橋が欲しい!」って、永年思っていた。そんな地元の熱意と設計者の良いものを造りたいという熱意、それを受けとめ、より良い橋にしていこうという現場の熱意。いろんな人の熱意があってこの橋ができたんです。
●藤田 たくさんの人のおかげでこの橋はできたんですね。
●大野 橋の周辺景観についても、現場を見て、話し合っただけで決めたことがありますよ。例えば橋の手前の山肌ですが、普通はコンクリートで固めるんです。でもせっかくの凝灰岩の迫力ある岩肌を隠すのはもったいない。黒い岩肌を生かせるよう、そのままにしています。ただ、凝灰岩は軟らかくて岩肌から岩石がはがれ落ちてしまう。それが道路に飛び出さないよう足元に低木を植えました。

地域性を生かしたデザインを

●藤田 設計をするときから、現場の人といろいろ話し合っただけです。
●大野 いいえ、設計段階では施工者が決まっていなくて、話し合うことはできないの。工事がスタートしてから施工者と話し合っただけです。例えばワイヤーの色は周囲の緑を生き活きと見せるため反対のオレンジにしよう、それを具体的にどの材料でどの色にするかとか。オレンジって、日の色。緑の中で違和感なくアクセントになる。
●藤田 友達の家に行く時、鮎の瀬大橋が見えるんです。太陽が当たるとキラキラして、きれいですね。そういうふうに、いろいろ話し合う工事中で、うれしかったことは、どんなことですか。
●大野 だんだん、地元の人々の顔が見えてきたことですね。地元の人と会って、この橋を実際に通る人の顔が見えてきた。この人たちに橋を楽しく使ってほしい。設計時には地形を含めた500分の1の模型を作りましたが、工事中にはたくさんの部分模型を作って打ち合わせをしました。ほかに、現場付近で見られる凝灰岩や石灰岩をどこかに使いたくて、橋の歩道や鮎の瀬大橋を見渡せる菅地区側の広場にこの石を敷き詰めたんですよ。
●藤田 土木というのは道や橋を造ったり、大きな工事ばかりですよ。
●大野 土木は公共性が高いものです。藤田さんは税についての作文で鮎の瀬大橋を取り上げられたんですね。実際橋を造るにはたくさんのお金が使われます。土木は数字だけの経済性だけで計れないところがあります。三陸海岸で、きれいな海を取り戻すという話がありましたが、そういうように、周囲のことも考えていかないといけないですね。一方、橋は特に交通の要所に当たることが多いので、地域の景観に与える影響も大きいでしょう。絶対に隠せないものじゃないですか。美しさ、というのは大事だと思うんですよ。周囲の風景と調和するデザインを、と思うとやはり地形をはじめとする地域性を知らないといけませんね。地域の良さを引き出すものでないと。それに、橋は一カ所からだけ見るものではありませんよね。どこから、どう見えるかも、デザインのポイントになります。この鮎の瀬大橋の場合は、初めて町の中心部から橋を渡る方には、一度車から降りて歩いてみてください。切り返すの先にあって深い谷が開ける風景を見てほしいので、一般の建物と違って、あまりピンポイントでは考えない。次々と違った景観を楽しめるようなデザインにしました。
●藤田 大野先生をはじめ、たくさんの方の力が合わさって初めてこんなものが出来るんだということが分かって感動しました。今日はありがとうございました。



矢部町立矢部中学校3年
藤田 沙織
FUJITA SAORI
入選作文紹介

「熱い思いで税を使おう」

私の住む矢部町に県内一、川からの高さが高い「鮎の瀬大橋」が開通しました。この橋は、菅という地区に建てられ、今までは矢部の中心部まで行くのに三十分もかかっていた時間が、開通したおかげで十分まで短縮することができるようになりました。ですが、この橋が開通するまでには色々な問題があったと思います。第一に、この建設には莫大な費用がかかります。そのほとんどが税金です。周りからは、「お金のムダ使いだ」という声もあったそうです。また、橋をつくるだけではなく、5.7kmの農免道路も作らなくてはなりません。そのために、計画をしてもなかなか実現には至りませんでした。

しかし、住民の百年来の願いが通じ、今年八月四日、大橋の開通が実現したのです。私もその日に橋を見に行きました。橋までの農免道路、通称「あくりろーど」も、とても広くきれいで、ますます橋への期待が膨らみました。到着すると、とにかくその大きさに驚きました。川からの高さもとても高く、雄大できれいでした。多くの人々が待ち望んでいた夢がかなったんだなあと嬉しく思いました。この橋は、みんなの税金で建ちました。その中には反対の声もありました。だけど、この橋を見て、私は建てて良かったと思います。多くの人々の願いは、大きな大きな金額にも勝るものがあると思います。

今、税金を払わない人がいます。そういう人々には、税金がどこで何のために役だっているかということを知ってもらいたいと思います。人の役に立っているんだということがわかれば、少しは税金を払う人も増えると思います。

そのためにも、税金を使う方々は、十分な話し合いが必要だと思います。がんばって納めている人たちの大切なお金が無駄にならないようにしてほしいです。

私も大人になったら、税金を納めなければなりません。たいへんなことだと思うけど、一人でもいいから心から感謝してくれる人がいるなら、私はとてもいい気持ちでお金を納めることができます。

この「鮎の瀬大橋」を建てたのはみんなの税金ですが、つくるのを実現に導いたのは、人々の熱い思いです。

これからも一人でも多くの方々が幸せになる税金を納め、あるいは使われていくことを願っています。

インタビューを終えて

地形と構造が織りなす ドラマチックな橋梁。

鮎の瀬大橋はV型橋脚のラーメン構造と、70mの主塔から鋼材ケーブルを張り渡した斜張橋の複合構造。町の中心部からカーブの多い山間の切土部を抜けると、突然視界が開け、谷の上へ。そこが、V型橋脚の上だ。深い谷と緑の重なりから対岸に目を転じると、張り出されたケーブルが太陽にきらめく。ドラマチックな風景の変化が、ここにはある。「土木の世界で、今回のように設計者の名前を一般に公表すること自体、大変珍しい」。環境デザイナーとして「横浜ベイブリッジ」などを手がけてきた大野美代子氏にとって、アートポリスは設計者としての新たなチャンスだった。「土木の世界にも手仕事の感覚を残したい」と、舗装材は現地で見られる凝灰岩や石灰岩をコンクリートに手作業で埋め込んだ。矢部町の自然環境を損なわないデザインをと知恵を絞った複合構造が、最近注目を集めているという。

